生きること・かかわること

学校長　村上英治

先日，緒川小学校を見学する機会を得たことがあります。テレビでも紹介されたことのあるオープン・システムを標榜する学校です。「適性に応じ，自ら学ぶ学校生活の創造を求めて」をスローガンに「はげみ学習」「週間プログラムによる学習」などをとおして，総合的学習に焦点づけながら，子どもたちの成長・発達をうながすてだてを探る学校経営に，私はきわめて深い感銘をうけました。

中でも小学校5年生・6年生を対象に，あるいは「いのち」，あるいは「生きる」というトピックスで構成されている，体験的・活動的なプログラムは，まさしく人間関係の認識を目標においての，今ここで私たちが意図しようとしている，生徒の学習意欲を高め，ひとりびとりを大切にする学校づくりの方向に，そのままあてはまるものとして，いろいろと考えさせられるものがありました。

ひとりびとりを生かす教育，その主体性を重んじ，ひとりびとりの中に内包する内発的動機づけを大切に守り育てていこうとする教育を，私たちはほんとうに志向していきたいと考えております。今年度の研究協議会のテーマも，その線に沿って設定されたのです。

今期，私の講義を受けているひとりの女子学生（それは今年度第1期の教育実習をこの附属学校で受けた学生でもあるのです）が，私の要請にこたえて，最近次のようなレポートを寄せてくれました。人間の内に本来的にひそむ，この種の内発的動機づけをひき出す重要な意味を，はしなくも語ってくれたものとして，少し長きにわたりますが，その一部を以下引用しておきたいと思います。

……

今ドラマのシナリオを書いているのだ。
一年程前から知りあいのプロデューサーにやってごらんと励まされるままに，何度も脚本を書いては直し，直されては書き，の繰り返しを続けている。
書いた脚本を百とする。
その九十九が金の取れる本としてダメだとする。言うまでもなく，こういう脚本は，使いものにならない。
「バカヤロォー！　こんな物を何百万，何千万の視聴者に見せられるかァ！」
とほとんどのプロデューサーが，そう叫びながら原稿を引き裂き，屑籠へ投げ捨てるに違いない。
そういう世界である。またそれが本当である。くだらない本を書いた方がいけないに決まっている。
私がお世話になっているプロデューサーはと言うと，やっぱりそう叫ぶ人である。
しかしこの人，心の中でしか叫ばない。いつも茶色のサングラスをかけているから，その目の内までは読みとれないが，顔はニコニコ笑っている。
九十九％使い物にならない本を，それを書いた者を前に，全くいつもと変らずに微笑している。
そして静かに言うのだ。
「この部分はいいね。とってもいいね」
この部分とはつまり，残りの一％の事である。使いものにならない九十九％のことには，一言も触れない。
この部分はいいね，この感覚だよ，と繰り返す。
それは，一見優しさに溢れた言葉のようだが，とんでもない，すさまじい言葉なのである。
〈俺は君を殺さない〉そう言っているのだ。原稿を引き裂いて屑籠へ捨てたら，君はここを出た後，地下鉄のホームから電車に飛び込むよね。ハイ，サヨナラ——って。あゝ，いい気持ちよ——って。でもそうなったら，君，一％はどうなるの。この一％はいいんだよ。紛れもなく君から生まれたものなんだ。その一％が百％になったら，面白い脚本になるじゃないの。電車に飛び込むのは別の機会にも出来るじゃない。ね。
今日は，家へ帰って，もう一度机に向かいなさいよ。
そりゃ，苦しむでしょうよ。七転八倒し，血ヘドの出るぐらい吐くかもしれない。それくらいしなきゃ，一％が百％にならないんだもの。
でも——百％にしようよ。どんなことがあってもいいから，とにかく百％にしようよ。
静かにプロデューサーはもう一度呟く。
「この部分はいいね。とってもいいね」
……

大学での私の講義では，機会があるごとに，お互いにきりむすびというか，よびかわしというか，語りかけた相手方の反応を求めるため，私の働きかけに対するうけとめを，また投げかえしてほしいと要求することが多いのです。そしてそんなとき，こうしたレポー

トにたびたび出会って，私はすごく感動してしまうのです。私が訴えたかったことが通じあえたんだな。こうして人と人との間にかかわりのかけはしが渡されたんだな。そんな思いにひたされるのです。

人を動かす，内発的動機づけの大切さを思うからにほかならないからなのでしょう。

この五月，三たび附属中学3年生の修学旅行にあとからですが加わる機会をもつことができました。最後の日，千里浜の国民宿舎をあとにして，金沢までのバス旅行，3年目の体験ですが，子どもたちとの接触はまた心から楽しいものでした。

そのバスを降りるに先立って，まだ就職しても日浅いと聞いたそのバスのガイドさんが，生徒ひとりびとりに，ささやかだけどプレゼントしたいと申し出たのです。それは手製の栞でした。そのオモテには，そのバスにのりあわせた生徒ひとりびとりの名前を，いつ覚えたのでしょうか。ちゃんと書いてくれていたのです。私自身はたった一日つきあっただけですが，その私にも「校長先生」とよびかけて，私の名前を記し，さらに「2日間ありがとうございました。本当にふつつかなおともで申しわけありませんでした。また機会がありましたら……お元気で」と裏面にしたためてくれたのです。こんなこと，何度も観光バスに乗って始めてのことです。生徒たちもみんなすごく感激していました。

僅か2日のかかわりでしかない，そしてこの後ふたたび相まみえることも先ずないであろうことを，お互い十分承知している関係の中での働きかけであるのです。子どもたちの彼らなりに，このバス旅行を楽しんだことへの，こうしたそれこそ心のこもったプレゼント。ひとりびとりを大切に，そんなささやかな行為の中で，生徒たちも心のふれあいの美しさを学んでくれることになるのでしょう。

昨年秋から，私は高校の必修クラブで，『自己発見』というコースを担当することにしました。若い諸君になまで接触する機会を少しでももちたいとの思いにほかなりません。「自由な話しあいをすすめる雰囲気の中で，何か自分に対する，また他者に対する問いかけをとおして，改めて考えてみよう」とよびかけたところ，それでも20名近い高校生が集まってくれました。

どう展開していくのか，私自身見当もつかないまま，暗中模索の半年を終えて，そのあとほんとに，若い諸君とこうして親しくかかわりもててよかったなと，今心から思っています。

現代を生きる高校生，その生態はさまざまです。でもまったくすなおにそこで，ありのままの自己を表現してくれる場合であれ，自分自身をまったく防衛したまま，カッコウつけてしか自己を表出できない場合であれ，ともかくその子たちはせい一ぱいに，自分ひとりのそれぞれの生き方をあらわにしてくれるのです。

この3月，春休みのおわりに，このクラブに所属していたひとりの女生徒から一通の手紙を私はうけとりました。

……

人間って不思議ですね。そしてものすごくおもしろいものですね。三学期に入ってとくにそう思いました。いろんな人がいて，かわった考えの人がいて……
それぞれの人にそれぞれの過去・経験があるんですね。それらの経験をふまえて現存している人が目の前にある。

……

こうした冒頭から始まって，あと長文の手紙がつづきます。本人自身がこのクラブに入ってそれなりに得たこと，得られなかったことを卒直に語ってくれておりました。

……

自己発見クラブで活動したこと自体が，私を成長させることだったか，よく分りませんが，クラブに入っていたことがまた，人に興味をもつことに，何らかの影響を与えていたように思います。

……

人間に対する関心がこうして育くまれ，人が生きること，かかわることのきびしさ，重さ，そしてそのすばらしさを，こういう体験をとおしてでも，若い人たちが感じとってくれるようになれば，と心から願う私です。

附属学校で今年11月にはまた研究協議会をもちます。始めにも申しましたようにそのテーマとして，「生徒の学習意欲を高めるためのさまざまな工夫――生徒ひとりびとりを大切にする学校づくりの中で――」が設定され，それぞれの教科ごとに新らしい取り組みが始まっています。

その動機づけの一助にもなればと願いつつ，私自身つい身近で体験した，2・3のエピソードをここに提起して巻頭のことばにかえたいと思います。

（昭和59年6月15日）